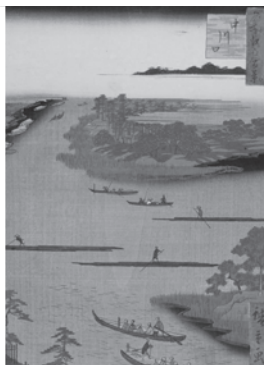


平成22年10月30日～

中山船番所資料館 リニューアル



下町文化

NO. 251
2010.09.25

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 中川船番所資料館リニューアルのあらし
- 東京文化財ウィーク 2010
東京 9 区文化財古民家めぐり
- 江戸の町内探訪①
清住町
- 江東の古道をゆく②
浅間竪川小学校周辺の古道
- 江東歴史紀行
幕末維新期の越中島
- 江東区民俗芸能大会
演目紹介

平成22年10月30日

中山船番所資料館
リニューアル

江東区中川船番所資料館は、平成15年3月の開館以来、中川番所や関東の水上交通、江戸和竿をはじめとする釣り文化を伝える施設として、企画展示や関連事業を展開してきました。

この度、平成22年3月に7年目を迎えるにあたって、江東区の歴史や文化を伝える「地域博物館」としての性格をより深めるべく、2・3階の常設展示をリニューアルすることとなりました。

従来の展示である水上交通や釣り文化に加え、江東区がこまめだどってきた歴史、育んできた文化を広く取り上げることで、より江東区という地域を深く理解していただける内容を目指していきます。また、区内の方々等からご寄贈いただいた昔の生活用品を揃えた「昔の生活」コーナーや江東区の民俗芸能の一つである「木場の角乗」の雰囲気を感じることができる「江東区の伝統芸能」コーナーなどでは、実際に資料に触れ、感じることができる内容にしていきます。

10月30日のリニューアル後は、新たな常設展示を踏まえて、さまざまな企画展やイベントを開催していきます。

リニューアルの あらまし

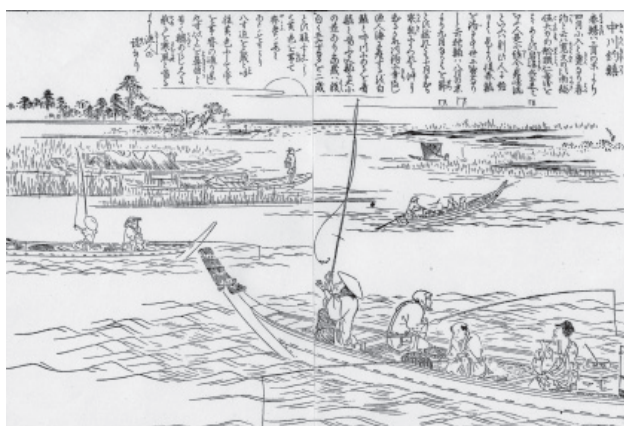
■3階■

I 江戸・東京の水上交通

江東区周辺の河川を中心に、江戸時代から近代（明治～昭和）までの関東の水上交通の歴史を取り上げます。また、船で行き交った人や物資、小名木川を通航した和船や蒸気船、渡し場と橋、小名木川沿岸の史跡などに関する資料を展示します。

II 江戸和竿と釣り文化

江東地域の掘割や海辺は、江戸時代から釣りの名所として知られていま



「中川釣鱸」（『江戸名所図会』）

た。ここでは、江戸・東京周辺の釣り文化の歴史と、その伝統を支え機能と美しさを兼ね備えた江戸和竿や釣り道具の数々を展示します。

■2階■

I 昔の生活

区内在住の方々から寄贈された資料をもとに、昭和30年代後半から昭和40年代にかけての生活のようすを再現します。また、区内で撮影された古写真を取めたアルバムを置き、当時の雰囲気を感じられるようにします。

II 江東区の歴史

このコーナーでは、「新田開発と江戸・東京の近郊農村」「掘割の展開」「木場の変遷」「江東区の近代工場」「関東大震災と復興の軌跡」「臨海部の成立」「水害との戦い」「寺社と祭祀」「江東区の漁業」などといったテーマの中から、5つのテーマを選んで定期的に入れ替えながら、江東区の特徴ある歴史を紹介していきます。

III 江東区の民俗芸能

江東区域には、地域の生業や暮らしの中から生まれた「木場の角乗」、「木場の木遣」、「深川の力持」、「富岡八幡の手古舞」、「砂村囃子」といった民俗



東雲飛行場隣の海岸（昭和30年代）

芸能があります。ここでは、江東区の民俗芸能を紹介するとともに、「木場の角乗」の衣装を着て記念撮影ができるコーナーも設けます。

IV 「城東」と「深川」

城東地域は江戸・東京の近郊農村として発展し、深川地域は明暦の大火以降に都市化が進むという異なる地域特性を持っていました。「城東」と「深川」、それぞれに特徴がある二つの地域は、昭和22年（1947）に江東区として一つになります。このコーナーでは、それぞれの地域の特色を取り上げて展示します。

V 下町のくらし

江東区の町と人を支えてきた町会や

商店街。都電もまた今ではなくなってしまいましたが、町の暮らしを豊かにしてきました。このような町会や商店街の歴史や活動の記憶、都電の路線図や看板、都電が走る町のようななどを紹介します。

VI コレクション展示

資料館で所蔵している貴重資料を定期的に展示替えしながら紹介します。

VII 錦絵・絵画・写真にみる江東区

江東区域は、かつて江戸・東京近郊の行楽地であり、歌川広重や豊国、小林清親らが制作した浮世絵の題材に多く取り上げられました。また、区民の方々からご寄贈いただいた古写真は、戦前・戦後の江東区を映し出す貴重な資料といえます。このコーナーではそれらを紹介していきます。

臨時休館のお知らせ

中川船番所資料館は、リニューアル展示の準備のため、次の期間臨時休館させていただきます。

平成22年10月

26日（火）～29日（金）

東京9区文化財古民家めぐり

都内9区に残る文化財の古民家を巡り、それぞれの住宅を見くらべてみませんか。建物や暮らしぶりを紹介するほか、様々なテーマに沿った合同解説会を開催します。

江東区では次の日程で区指定有形文化財（建造物）である旧大石家住宅の公開と解説を行います。また、「水害の歴史と備え」というテーマで、昨年に引き続き江戸川区の一之江名主屋敷との合同解説会も開催します。

10月22日（金）・11月7日（日）
14時～15時
11月24日（水）
10時30分～11時30分

は合同解説会（左表参照）です。

定員 30名

会場 旧大石家住宅 江東区南砂5-24地先 仙台堀川公園内

申込不要（当日直接会場へ）

問合 文化観光課文化財係

（3647）9819

合同解説会テーマと日程

④を除き申込制です。往復はがきに住所・氏名・年令・希望のコース名と日付を明記の上それぞれの申込先へ送付してください。申込多数の場合は抽選となります。

①川に沿った古民家 北区×足立区

日時 10月19日（火）・26日（火）
10:00 北区 旧松澤家住宅
13:30 足立区 旧和井田家住宅
費用 無料 定員 各日30名
申込先 北区 〆 切 9月30日必着

②古民家と屋敷林探索 江戸川区×世田谷区

日時 10月24日（日）
10:00 江戸川区 一之江名主屋敷
14:00 世田谷区 次大夫堀公園民家園
費用 100円 定員 30名
申込先 江戸川区 〆 切 10月14日必着

③長屋門の見比べ聴き比べ 杉並区×世田谷区

日時 11月3日（水・祝）・13日（土）
10:00 杉並区 杉並区立郷土博物館
14:00 世田谷区 次大夫堀公園民家園
費用 100円 定員 各日30名
申込先 杉並区 〆 切 10月21日必着

④水害の歴史と備え 江戸川区×江東区

日時 11月7日（日）
10:30 江戸川区 一之江名主屋敷
14:00 江東区 旧大石家住宅
11月24日（水）
10:30 江東区 旧大石家住宅
14:30 江戸川区 一之江名主屋敷
費用 100円 定員 各日30名
申込不要（当日直接会場へ）

⑤低地の古民家・台地の古民家 北区×板橋区

日時 11月20日（土）
10:00 北区 旧松澤家住宅
13:30 板橋区 旧田中家住宅
費用 無料 定員 50名
申込先 北区 〆 切 11月8日必着

⑥古民家の屋根 目黒区×世田谷区

日時 11月26日（金）
10:00 目黒区 旧栗山家主屋
14:00 世田谷区 次大夫堀公園民家園
費用 無料 定員 30名
申込先 世田谷区 〆 切 11月15日必着

その他の解説日（申込不要）もあります！

【足立区】10/23（土）・30（土）10時半～16時（随時）【板橋区】
〔旧粕谷家住宅〕11/8（月）～14（日）10時～16時（随時）・〔旧
田中家住宅〕11/9（火）～14（日）9時半～17時（随時）【北区】
10/10（日）、11/12（金）10時・11時・13時・14時・15時～
【杉並区】10/10（日）14時～【世田谷区】〔岡本公園民家園〕
11/6（土）13時半～【練馬区】11/14（日）11時～【目黒区】
11/19（金）13時半～

古民家の所在地と問合・申込先

古民家所在地		問合先・申込先
足立区	旧和井田家住宅 足立区鹿浜2-44-1 都市農業公園内	足立区教育委員会文化課文化財係 〒120-8510 足立区中央本町1-17-1 TEL 03 (3880) 5984
板橋区	旧粕谷家住宅 板橋区徳丸7-11-1 旧田中家住宅 板橋区赤塚5-35-25 板橋区立郷土資料館内	板橋区教育委員会生涯学習課文化財係 〒173-8501 板橋区板橋2-66-1 TEL 03 (3579) 2636
江戸川区	一之江名主屋敷 江戸川区春江町2-21-20	江戸川区教育委員会教育推進課文化財係 〒132-0031 江戸川区松島1-38-1 TEL 03 (5662) 7176
北区	旧松澤家住宅 北区赤羽西5-2-34 赤羽自然観察公園内	北区教育委員会北区飛鳥山博物館事業係 〒114-0002 北区王子1-1-3 TEL 03 (3916) 1133
杉並区	旧篠崎家住宅主屋 旧井口家長屋門 杉並区大宮1-20-8 杉並区立郷土博物館内	杉並区立郷土博物館 〒168-0061 杉並区大宮1-20-8 TEL 03 (3317) 0841
世田谷区	次大夫堀公園民家園 世田谷区喜多見5-27-14 岡本公園民家園 世田谷区岡本2-19-1	世田谷区教育委員会生涯学習・地域・ 学校連携課民家園係 〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14 TEL 03 (3417) 5911
練馬区	旧内田家住宅 練馬区石神井町5-13 池淵史跡公園内	練馬区立石神井公園ふるさと文化館 〒177-0041 練馬区石神井町5-12-16 TEL 03 (3996) 4060
目黒区	旧栗山家主屋 目黒区碑文谷3-11-22 すすめのお宿緑地公園内	目黒区めぐろ歴史資料館 〒153-0061 目黒区中目黒3-6-10 TEL 03 (3715) 3571

施設によっては入館料が必要になります。それぞれの解説会の詳細については見学希望の各区へお問い合わせください。

清住町

本シリーズでは、江戸深川の町を取り上げ探訪します。その第一回は、小名木川と隅田川の合流地点で、万年橋の南側に位置した清住町（現在の清澄1・2丁目付近）です。そこには、どのような世界がひろがっていたのでしょうか。嘉永五年（一八五二）「本所深川絵図」と文政十二年（一八二九）『御府内備考』の記述をもとに、散策しましょう。

清住町の歴史

清住町は、寛永六年（一六二九）に弥兵衛という人物によって開発された町で、元禄八年（一六九五）頃に弥兵衛町から清住町に町名を変えました。名主は、18世紀初め頃まで弥兵衛家が代々勤めました。

また、同町の南に展開した佐賀町・相川町・熊井町・諸町・富吉町・黒江町・



「本所深川絵図」(嘉永5年 尾張屋板)

大島町とともに、深川獵師町と呼ばれ、月に三度の割合で、幕府に魚介類を納めるとともに、持っている船で、幕府御用（人・荷物の運搬など）も務めました。

町内を歩く

出発地は、小名木川に架かる万年橋南詰(①)です。ご存じの通り、万年橋は、歌川広重の「名所江戸百景」や葛飾北斎の「富嶽三十六景」に描かれている、江戸の名所です。

万年橋から西に歩くとすぐに「御舟蔵」(②)があります。御舟(船)蔵とは、幕府の船を保管する施設で、船を漕ぐ水主(労働力)がすぐ東(おそらく御船手組屋敷)に居住していました。幕府にとって隅田川は重要な川ですので、ほかにも永代橋南詰めと新大橋の北に御舟蔵が設けられていました。なかでも新大橋北の御舟蔵は、その規模が大きかったようです。

御舟蔵をあとにして、左に曲がると右には隅田川の雄大な流れが迫ってきます。絵図には見られませんが、実際には川沿いにあった幕府の土地に長さ四五間(八一m)、幅一間三尺(二・七m)の物揚場・物置場が設けられていました。その広さは六七坪五合で、使用者は坪単位で使用料を払いました。その額は、月に銀一分でした。ただし、

この河岸は、町内地先にあった河岸の一部だったようです。そこでは、荷揚げに従事する人々の姿を見ることができたはずですよ。

また、町内西側の大川端には、間口2間(3・6m)、裏行2間3尺(4・5m)の自身番屋がありました。

一方、左方に目をむけると、牧野豊前守屋敷(丹後国田辺藩Ⅱ現、京都府)、霊運院、町屋、それから松平陸奥守蔵屋敷(仙台藩伊達氏)と続いています。

このうち、霊運院(③)は、深川の名所のひとつとして、斉藤月岑の『江戸名所図会』に描かれています。小名木川とそこに架かる万年橋、御舟蔵などは、町の様子をよく示しています。



「深川霊雲院」(『江戸名所図会』)

す。ちなみに、仙台堀の名称は、河口にあった仙台藩蔵屋敷にちなんで付けられたと言われています。

さて、前方には、その仙台堀にかかる「上の橋」が見えてきました。そこを渡ると佐賀町に入ってしまうので、その手前を左手に曲がります。そして、仙台藩蔵屋敷に沿って仙台堀沿いに歩くと、すぐに堀にぶつかります。そこをさらに左手に曲がると、「清住町」の裏手に出ます。そこには、伊奈半十郎をはじめ、いくつかの武家屋敷があります。ここは清住町ではありません。ちなみに、ほぼ同時期の絵図『寛永録 壱』所収)によれば、霊雲院脇の細長い「清住町」(④)には4筆の土地が、その隣の同町には3筆の土地があり、そのほかに「扇橋町続」(白河4・4付近)と「永堀町続」(福住2・6・7付近)に清住町代地(幕府の土地収用にもなう代替地)がありました。

(文化財専門員 出口宏幸)

江東の古道をゆく② 浅間竪川小学校周辺の古道

前回に続いて、浅間神社（亀戸9）境内の道標が案内する浅間神社、亀戸天神、六阿弥陀（常光寺）、そして浅草へと至る江戸時代以来の古道を訪ねます。今回は、浅間神社から、浅間竪川小学校南側の古道を行います。

では、前回の浅間神社から出発します。神社南側を通る亀戸浅間通りを西へ行くと、広い都道に出ます。都道を京葉道路に向

かって歩いて行くと、脇道があります。この道が古道の名残です（写真①）。この道を進



※丸数字は写真番号に対応
点線は古道（推定）



むと、すぐに京葉道路に出ます。道路の反対側に見える細い道が、古道の続きです（写真②）。向こう側に渡る横断歩道が無

いので、右手の交差点に廻って渡ります。写真③は道に入って40mほどの地点から撮ったもので、この先の右側には浅間竪川小学校があります。

浅間竪川小学校南側の古道

昭和30年代前半までは、校門の手前回りから左手に折れる道があり（写真③）、現在はライフ亀戸店（亀戸9-24）の敷地になっている所を通過、亀戸9丁目と



7丁目の境である道に通じていました（地図点線）。ライフ西隣にガソリンスタンドがありますが、その裏手（北側）に、古道の痕跡とみられる道があります（写真④）。

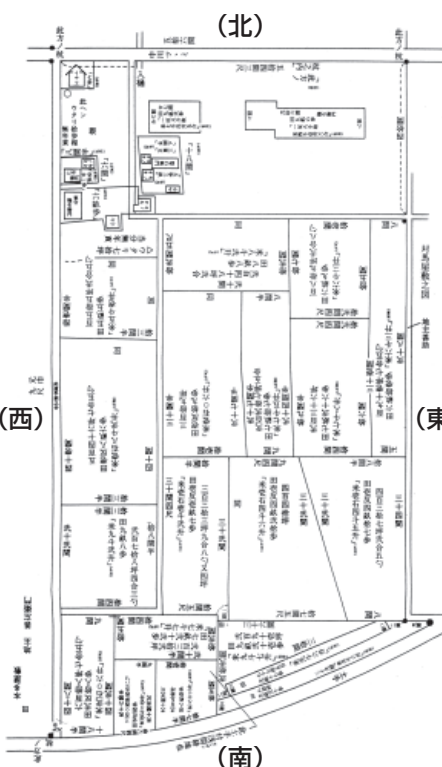
道の先を左手に折れ、いったん京葉道路に出て、9丁目と7丁目の

境となっている道に入ります。この道は、総武本線の高架をくぐって、亀戸中央公園をつらぬき、水神社（亀戸4-11）へと続いて行きます。明治38年（1905）の「東京府南葛飾郡全図」によると、「堺橋道」と呼ばれていたようです。写真⑤は京葉道路から「堺橋道」に入っ



旧家の絵図に古道を見る

写真⑤の右に折れる道は（亀戸9-27と35の境）、江戸時代以来の道であることが、区指定有形文化財「牧野家文書」中に残されている「亀戸周辺田畑屋敷見取図」（左下トレース図、『牧野家文書』5に掲載）で確認できます。



の東境は、浅間竪川小学校の敷地にかかっていました。また、対馬屋敷の西側の地は「本多屋敷」と呼ばれていました。かつてあった本多下野守の屋敷に由来すると思われます。対馬・本多両屋敷地の境であったこの道は、牧野家の道でした。

本図で注目されるのは、南境に「土手」と記した、ややカーブする道を描いていることです。この土手道は、写真④から⑤の間にあった古道にあたり

（文化財専門員 栗原修）

幕末維新期の越中島

深川江戸資料館で開催されていた「江東幕末発見伝―」では「軍事拠点 越中島の成立」というコーナーがありました。今回の江東歴史紀行では、江戸時代の終わり頃から明治時代にかけての越中島の歴史についてみていきたいと思います。

越中島が最初に確認できるのは、明暦（万治）年間（1655～61）に旗本の榊原越中守照清が屋敷地として拝領した時です。この頃までに、越中島は埋め立てによって陸地となっていたようです。越中島という地名は、この榊原越中守に由来しています。しかし、越中島は高波などで浸食され、榊原越中守は屋敷地を幕府に返上します。

その後、18世紀になると越中島は再び埋め立てられ、主に町人地となります。文政11年（1828）作成の「町方書上」によれば、越中島の町人地は合計7700坪余、総家数は179軒でした。

越中島の歴史が大きく変わるきっかけとなったのは、天保11年（1840）に清とイギリスとの間でおきたアヘン戦争です。この戦争で、強いと思って

いた清がイギリスに敗れたことに、幕府は大きな衝撃を受けます。

日本の近海には、18世紀末からロシアやイギリス、アメリカの船が出没するようになっていました。幕府は外国との交流をオランダ・清・朝鮮・琉球に制限していたので、ロシア・イギリス・アメリカの船が日本に近づいたら大砲を撃って追い払うことにしました。しかし、アヘン戦争の結果をうけて、外国との戦争をひきおこしかねないこの方針を幕府は改め、ロシア・イギリス・アメリカの船が着岸したら薪や水などを与えて穏便に引きとってもらうこととします。それと同時に、万一戦いになった場合に備えて、江戸湾の守りを強化し始めるのです。

天保13年（1842）、幕府は江戸湾のうち房総半島側の防御を忍藩（忍城は現埼玉県行田市にありました）に、三浦半島側の防御を川越藩に命じます。この時幕府は、江戸湾防御のために必要であれば便宜をはかると伝えています。

忍藩は翌年（1843）、房総半島側の防御の手当てのために、越中島に屋敷

地を拝領します。川越藩は屋敷地を拝領していないので、忍藩の越中島拝領は忍藩の希望によるものとみられます。屋敷地の絵図を見ると、荷揚げ場や馬場・射撃場などが描かれています。忍藩が軍事拠点として整備したのでしょう。現在の練兵橋のあたりに架かる橋を渡った先に入口の門があったようです。



現在の練兵橋

忍藩の越中島拝領に先立って、幕府は越中島の町人たちに立ち退き料を与えて強制的に退去させています。幕末に幕府が江戸の町人を強制退去させた事例はごくわずかしかなかった。幕府にとって江戸湾の守りを固めることがどれほど重要な課題であったかがうかがえます。

しかし、こうした備えも、嘉永6年（1853）のペリー来航にはほとんど

【越中島にあった町一覧】

町名	町ができた年	坪数	家数（内訳）
深川大嶋町代地（越中嶋町統）	寛文2年（1662） 6月25日	600	21（家守2、地借2、店借17）
深川越中嶋町	正徳元年（1711）	1200	45（家守4、地借25、店借16）
深川越中嶋拝借地	享保6年（1721）	1632	43（地借13、店借35）
深川築出新地	享保19年（1734）	2532	50（地借43、店借7）
深川定炭屋舗	天明2年（1782） 7月24日	1500	13（地借9、店借4）
深川定炭屋舗 続上納地	天明2年（1782） 10月24日	251.125	7（地借2、店借5）
合計		7715.125	179（家守6、地借94、店借84）

「町方書上」（1828年）より作成
（深川越中嶋拝借地の家数が合わないため、合計も合わない）



「江戸内海台場図」

（原剛『幕末海防史の研究』名著出版、1988年、56頁の図に一部加筆）

ど役に立ちませんでした。そこで、ペリー艦隊が帰るとただちに幕府は江戸湾奥に砲台の台場を築造します。忍藩は房総半島にかわって、今度は三番台場の担当になります。越中島から最も近い台場が三番台場でした。

文久3年(1863)に、忍藩は三番台場の担当を解かれます。約20年にわたる江戸湾防御は、忍藩の財政に大きな負担となっていました。翌年(1864)、忍藩は不要となった越中島の屋敷地を幕府に返上します。忍藩は建物の代金として2000両を幕府から受け取っています。

ペリー来航後、幕府は台場を築造して江戸湾奥の守りを固めるとともに、旗本・御家人の武術奨励のために講武所を設立します。講武所は安政4年(1857)に築地(現中央区築地)で開場し、剣術・槍術・砲術などを教えました。越中島には講武所の砲術訓練場が設置され、翌年には13代将軍徳川家定が越中島へ来て訓練を上覧しています。元治元年(1864)に忍藩が越中島の屋敷地を幕府に返上すると、元忍藩屋敷地も幕府訓練場に組み込まれました。

文久3年(1863)4月から12月の間に、越中島ではおよそ6日に1日の割合で砲術の稽古が行われていました。砲術の稽古を行う時には、越中島沖の船の航行が禁止されました。

幕府が江戸湾の守りをさらに固めるきっかけとなったのが、文久3年(1863)3月のイギリス艦隊の江戸湾来航事件です。イギリス艦隊は、

前年(1862)8月におきた生麦事件(薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件)の賠償を幕府に求めにやってきました。イギリス側は一戦交える姿勢を見せながら幕府との交渉にあたっています。結局、幕府が賠償金を支払うことで落着し、江戸湾は戦場にならずにすみましたが、その直後から、幕府は四番・七番台場の築造と佃島・越中島への砲台新設に着手します。

これまでこの4基の砲台は、石材が値上がりしたため予算が足りなくなり、佃島砲台以外は工事途中で建設が中止されたとされてきました。しかし、関係史料を再検討した結果、越中島砲台も元治2年(1865)2月以前に完成していることがわかりました。つまり、計画された4基のうち、隅田川河口部にある佃島・越中島の2基の砲台が完成し、一方で2基の追加台場は未完成に終わったのです。

台場は江戸湾奥の第一線の防衛ライン、隅田川河口部の砲台は第二線の防衛ラインにあたります。財政難の中で、幕府は第一線の防衛ラインの充実よりも、第二線の防衛ラインの新設を優先したといえます。隅田川河口部からは軍艦の大砲で江戸城を砲撃できるので、第一線の防衛ラインを突破されても江戸城を攻撃されないように、佃

島と越中島に砲台が設置されたと考えられます。越中島には、砲術訓練場としての役割に加えて、江戸城を守る軍施設としての役割も与えられたのです。越中島砲台があつた場所は、現在の東京海洋大学越中島キャンパス内にあたります。

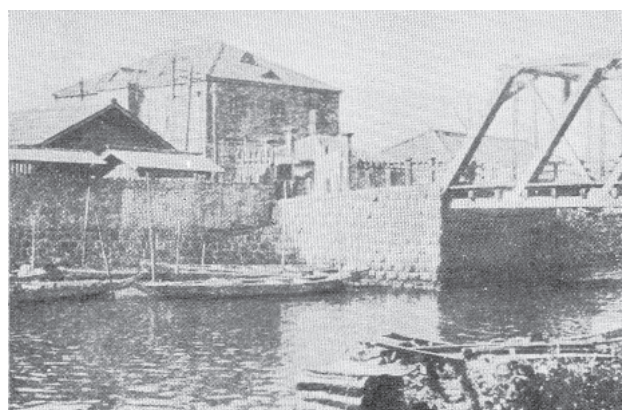
明治時代になりますと、幕府訓練場はそのまま明治政府の練兵場となります。明治3年(1870)9月8日には、越中島での練兵を明治天皇が天覧しています。なお、この時に君が代が初めて公式に演奏されたといわれます。相生橋のたもとには、昭和18年(1943)に建てられた、明治天皇の天覧を記念する大きな碑があります。



相生橋のたもとの明治天皇聖蹟碑

越中島練兵場は、東京から程近くにある大砲射撃場であり、小銃の正式な訓練ができる東京府で唯一の練兵場として重宝されました。しかし、大砲や小銃の性能が良くなって射程が伸びると、だんだん手狭になってきました。

明治16年(1883)には、陸軍歩兵大佐の乃木希典が越中島訓練場の拡張工事を提案しています。越中島練兵場は明治24年(1891)に廃止され、跡地には陸軍糧秣廠(食料や衣料品などの物資を保管・輸送するための施設)や深川憲兵分隊などが置かれました。



明治42年(1909)頃の「陸軍糧秣廠」
(『新撰東京名所図会』より。手前の橋は練兵橋。)

明治32年(1899)には越中島の陸軍用地の大半が引き払われ、商船学校(東京海洋大学の前身)などの土地となりました。商船学校は校地の整備を行い、明治35年(1902)に越中島への移転を完了します。これが、現在の東京海洋大学越中島キャンパスへと至っています。

(文化財専門員 中西 崇)

江東区民俗芸能大会

10月17日(日)開催

江東区に伝わる民俗芸能を一堂公開します。いずれも江戸時代にはじまったもので、現在は、それぞれ保存会・睦会により受け継がれています。日頃の研鑽により磨き抜かれた技は、数百年の時を経て、今に伝えられています。ぜひ、江戸の粋をご堪能ください。

【会場】 都立木場公園

【時間】 11時～15時45分

【演目】

11時～12時30分

★木場の角乗(東京木場角乗保存会)



木場の筏師(川並)が、水に浮かべた材木を薦口ひとつで乗りこなし、筏に組む仕事の余技から生まれました。葛西囃子の演奏とともに、

水に浮かんだ角材のうえで、様々な技が演じられます。

13時～15時45分

★木場の水遣(木場水遣保存会)

徳川家康が江戸造営に際して連れて



きた材木商が伝えたものといわれますが、確かなことは不明です。木遣は、息を合わせるために、掛け声のように即興の詩をつけて歌ったものです。現在は、祝儀の場などでも歌われています。

★木場の水遣念仏(木場水遣保存会)



戦前まで、木場の川並、船頭、材木屋などの間に永代講があり、その仲間の家に不幸があった時、この念仏を行っていました。戦前になくなった

永代講の百万遍念仏を、保存会の皆さんがお念仏と称して伝えています。

★砂村囃子(砂村囃子睦会)

江戸近辺の祭り囃子の一つで、享保年間(1716)に香取明神社(現在の葛西神社)の神官によって近隣の



会場 ●都立木場公園(木場4丁目)入口広場・ふれあい広場
交通 ●地下鉄東西線「木場駅」下車徒歩5分
●地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
●都バス「業10」〔業平橋駅～新橋〕木場4丁目下車

★深山の力持(深山力持睦会)

倉庫街であった佐賀町あたりで、米



俵や酒樽の運搬から発生した余技です。そこに力自慢が加わり、様々なものを使って技を披露します。

★富岡八幡の手古舞

(富岡八幡の手古舞保存会)



農村に広められたと伝えられています。祭礼・祝儀の場などで演奏されています。※獅子舞も演じられます。

富岡八幡宮

の3年に1度の大祭に行われる芸能です。特に所作はありませんが、神輿の前を木遣を唄いなが



ら練り歩くもので、現在は地元の有志の皆さんがつとめています。

訃報

深川力持睦会会長を長い間務めてこられた鶴岡秀雄氏は、去る6月17日ご逝去されました。また、鶴岡氏には、「江東区民俗芸能保存連盟」(民俗芸能5団体で構成)会長としても、江東区の民俗芸能の発展に多大なるご尽力をいただきました。ここに、慎んでご冥福をお祈り申し上げます。